



Title	会話の発達
Author(s)	仲, 真紀子
Description	2.
Relation	言語発達心理学, 内田伸子編著, (放送大学教材), ISBN: 4595587619, pp.27-36
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44717
Type	book part
File Information	YKHH1994_27-36.pdf



会話の発達

会話は言語を用いたコミュニケーションのうち、おそらく最も原初的なものである。書きことばが獲得されていない幼児期にあつては、語彙の獲得も、世界に関するさまざまな知識も、会話の規則も、会話の中で習得される部分が多い。この章では会話の発生とその発達の過程をみていく。

1. 会話の発生

●相互交渉とターンテイキング

会話における大きな特徴のひとつは、二人以上の話者が互いに番を取りながら発話をする相互交渉である。相手の動作にこちらの動作をあわせるというその基本的な形態は、1章で学んだ相互同期性や共鳴動作にもみられるが、授乳の過程にも一端をうかがうことができる。

自分が話し—相手が話し—自分が話し—相手が話すという交替のパターンをターンテイキングと呼ぶ。ケイとウエルズ(Kaye, K., & Wells, A. J.)¹⁾は、このような順番のパターンが授乳時の母子間にもみられることを発見した。授乳に慣れていない母親は、赤ん坊が乳を吸うのをやめると赤ん坊の頬を軽くつついたり、哺乳便を揺らしたりして授乳を再開させようと努める。だが、なかなか再開させることはできない。赤ん坊は揺すられるとかえって吸うのをやめてしまうのである。だが1週間もするうちに母親はつついたり揺すったりするだけでなく、その後には休止を入れるようになる。その結果、赤ん坊と母親の間に「赤ん坊が吸うのをやめる

—母親はちょっと揺すって休む—赤ん坊が吸い始める」というリズムがみられるようになる。会話にみられる交替のパターンは、ことばが出る前から準備されているのかもしれない。

●音声を伴う会話の成立

相互同期性や共鳴動作、授乳にみられるターンテイキングは、無意図的に行われる相互交渉である。だがやがて微笑や見つめあいによる意図的な相互交渉が始まり、これに音声が伴うようになる。こうなると会話が成立する基礎が整ったことになる。岡本²⁾によれば、幼児と養育者との間に会話が成立するには、以下の条件が必要である。

- ・音声が意味を担う（有意味性）
- ・それが意図的に使用される（意図的道具性）
- ・その音声の意味は、自分だけに通じるのではなく、他人にとっても同一の意味をもっている（協約性）

たとえば1歳前の赤ん坊が「んっ」といって手を出す。すると母親が抱きあげる。このような相互交渉はよくみられるが、そこでは「んっ」が「抱っこして」の意味を担っており（有意味性）、赤ん坊は抱っこしてほしいという意図をもってこれを使う（意図的道具性）。そして母親は「んっ」の意味を知っており（協約性）、すぐに抱きあげてやるのである。原初的ではあるが会話が成立しているといえるだろう。

やがて会話の中にもうひとつの要素、テーマがはいってくる。たとえば母親に抱っこしてもらって外に出た赤ん坊が「んっ」といって指さしをする。そこには猫がうずくまっている。「そうだねえ、ニャンニャンだねえ。」このように第三の対象（テーマ）が含まれるようになると、発展性のある会話が可能となる。

2. 会話の産出

●会話の発達要因

上でみたような会話は、しかし大人の会話とはずいぶん異なっている。大人とスムーズに情報交換ができるようになるためには、幼児はその文化における語彙や文法を学ばなければならない。また、考えや出来事など、話す内容を獲得しなければならない。さらに質問や要求の意図を察するなど、相手の心的状態の理解も必要である。そういった発達について、以下、みていくことにしよう。

●語彙の獲得と文法の発達

大久保³⁾によれば、幼児の語彙は1歳を過ぎるころから爆発的に増加し、就学するころには3000にもなるという(図2-1)。大久保は、一女兒を対象とした綿密な調査の結果から、子どもがことばを覚える過程を表2-1のように記述している。おおよそ3歳ぐらいになれば、「今、ここ」で起きている事がらについて、幼児は大人とかなり流暢に会話を楽しむことができるようになるといえるだろう。大久保が記述していることばの獲得過程についてみてみよう。

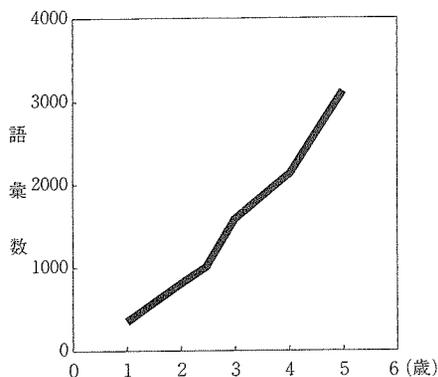


図2-1 語彙数の発達の变化

(大久保, 1981)³⁾より作成

表 2-1 ことばの発達

乳児期	(1) ことばの準備期 (0歳)
	(2) 一語文の時期 (1歳ごろ)
	(3) 二語文の時期 (1歳半ごろ)
幼児前期	(4) 第一期語獲得期 (2歳ごろ)
	(5) 多語文・従属文の発生 (2歳半ごろ)
	(6) 文章構成期 (3歳ごろ)
	(7) 一応の達成期 (3~4歳)
	(8) おしゃべりの時期 (4歳代)
幼児後期	(9) 第二期語獲得期 (5歳代)
	(10) 文字関心集中期 (就学前期)

(大久保, 1981)³より作成

- (1) ことばの準備期(0歳)：さまざまな相互交渉，愛着を形成し，認知能力も増す。「アーン」，「ウーク」などの喃語なんごが増え，音声の獲得がみられる。喃語は7，8か月のころが最も多くみられる。
- (2) 一語文の時期(1歳ごろ)：タータン(自分の名前)，ニヤー(そうじゃない)，アトウイ(熱い)など，単語が出始める。
- (3) 二語文の時期(1歳半ごろ)：「オウチ ココ」，「モットチョウダ イ」，「フチェン(風船) ナイ」など，単語と単語をあわせて文らしきものをつくることができるようになる。
- (4) 第一期語獲得期(2歳ごろ)：ものには名前があるということがわかり，自分自身が知らないものを知りたいという欲求が生まれる。「ウン」(といて指さしをする)，「コレ？」，「ナニ？」，「コレ ナニ？」といった表現で，ものの名前を聞くようになり，語彙が増える。
- (5) 多語文・従属文の発生(2歳半ごろ)：「オイシャサン チクント ヤッタ ココ」のような多語文や，「マタ ケンカスルカラ イヤナ

- ノ。オウチイカナイン」というような従属文がみられるようになる。
- (6) 文章構成期(3歳ごろ)：接続詞などを用い、お話ができるようになる。「ヨウコチャンノ ハナシ。アノネ。ケンキウジョニ イツカラ イッテラッシャイッテイッタノ。シテネ カエッテキタッテイウカラネ アノー ダカラネ アノ オミヤゲ カッテキタッテ イッタノ。シタラネ ヨウコチャンガネ アノ オネエチャント アソンデタノ ミヨチャント。・・・」
- (7) 一応の達成期(3～4歳)：日常生活に支障のない語(約1000)とそれらの語を組み立てる文法形式とを獲得する。
- (8) おしゃべりの時期(4歳代)：「アノネ」, 「ウントネ」, 「ソレカラネ」, 「シテネ」など、間投詞の多い、接続詞(て)でつないだ長い一発話を話すことができるようになる。
- (9) 第二期語獲得期(5歳代)：第一期語獲得期では、対象そのものは知っているが名前を知らないので聞く、という質問が多かった。これに対し第二期語獲得期では、大人の話す中にあることばの意味が理解できないので聞くという質問が多い。「アワレット ナニ」, 「ハンダンッテ ナニ」, 「ハンソクッテ ナニ」, 「イマ オネエチャンニ ナンテ イッタノ?」, 「タマネギハ ナニカラ デキタノ」, 「ニンゲンッテ ドウシテ イキテルノ?」, 「ドウシテワカルノ? リユウヲイッテ」などなど。
- (10) 文字関心集中期(就学前期)：文字に関心をもつようになる。話しことばはマスターしたかのようにもみえるが、受け身、使役形の間違い「ママネ ヨルネ オバアチャンニ オソト オイダシタ」や接続助詞、接続詞の間違い「オツキサマノ ハナシ ヤッテアゲタノ ソンデ(けれど) チュマンナイッテ オヨイデ ドッカ イッチャッタノ」などはまだ多い。

●知識の獲得と会話の広がり

語彙や文法の獲得に加え、さまざまな知識を学習することで、会話の世界は「今、ここ」で生じていることだけに留まらない広がりをみせるようになる。一般に、私たちの知識は意味記憶とエピソード記憶を区別することができる⁴⁾。意味記憶には辞書にあるような一般的な知識や概念、また毎日の生活パタンのように安定した事象の流れなど（これをルーチンと呼ぶ）が含まれる。またエピソード記憶とは、特定の時間、場所で生じた出来事や事実のことであり、特に自分が体験した記憶のことを「自伝的記憶」と呼ぶこともある。幼児は3歳くらいになると、日常の出来事についてのルーチンを獲得し始め、3～4歳で時間、場所といった手がかり語を用いてエピソード記憶を保持し、語るようになるという^{5) 6) 7)}。

獲得されたルーチンが反映されている、ごっこ遊びについてみてみよう。表2-2は、1歳代、2歳代、4歳代の同年齢の友達同士（ピア）のごっこ遊びでの会話を記録したものである。お茶を飲む、あるいは食事をするといった簡単なルーチンではあるが1歳半よりも2歳半の幼児のほうが、より分化したルーチンとなっている⁸⁾。しかしより包括的なルーチンが期待されるのは上述したように3歳を過ぎてからで、表の4歳児の例では日常のルーチンを超えて、ごっこの広がりがみられる⁹⁾。この会話では3種類の声色が用いられた。「○○なのね」は通常の音程だが、あらたまった言いかたでなされ、この宣言によって架空の世界が構成される。また登場人物の発話は、それぞれお姉ちゃん、お兄ちゃん、犬の声でなされる。それ以外の発話（ものを探したり、遊びとは直接関係のない会話）は、普段の声でなされる。種々のルーチンの組み合わせや変形によって、ごっこの世界は膨らんでいく。

表 2-2 ごっこ遊びの発達

1 歳半 (A : 女兒, B : 男兒) (内田, 1986)⁸⁾

B : ジャー。(母にむかってお茶を入れる。2 回繰り返す)

A : ジャー, ジャー, ジャー。(Bにお茶を催促する)

B : ジャー。(とAの茶碗に入れる)

A : (飲む真似をしてからBに茶碗を差し出す)

B : オチャ, ウー。(Aの茶碗に入れる)

A : (飲む真似をしてからBに茶碗を差し出す)

B : ウー。(お茶をきゅうすで入れる真似)

A : (茶碗を差し出し) オチャ。(Bに催促する)

B : ウー。(お茶を入れる真似)

A : (飲む)

B : (飲む)

2 歳半 (A : 女兒, B : 男兒) (内田, 1986)⁸⁾

A : ねてくださいなー, ねてねー, ねてますねー。

B : (家の後ろで寝ている)

A : ジャー, ジャー, ジャー, ジャー (独語)。朝です。

B : ん?

A : もうお湯わかしましたけどね。おつゆはまだにえてませんけどね。

B : (黙ってAを見る)

A : エト, お茶のんでください。いっぱい, お茶。

B : (お茶を飲みに, Bの所に近寄る)

A : このお茶とかね。

B : あつくないかー。

A : ぬるいよ。

B : ん?

A : お水いれたから。

4歳 (A: 女兒, B: 女兒) (仲, 1990)⁹⁾

[宣言は (宣), 演技の発話は (演), 他の発話は (他)]

A: (宣) あるひ, Aは, んーとね, ない, ないてる犬をやります。
・・・ここにももっとね・・・。(笑う)

B: (宣) ねね, 仲良しなのね, この犬は。

A: (演) ねえねえ, わんわんわん。

B: (演) 今日は遊ばないことにしようよ。

A: (演) うん, 眠たいからね, わんわん。

B: (宣) そしてもうぐっすりと眠っちゃったのね, これはね, 赤ちゃんの犬ちゃんだから。

.....

B: (宣) Bちゃんもってるのね。お姉さん (B自身) のほうがおとなしいのね, もってたら。お兄ちゃん (Aのこと) はさ, わんわんてほえるのね。

A: (宣) ちがう, お兄ちゃん (A自身) の犬のほうはね, あのね, ほえないの。

A: (他) Aちゃんこっち, じゃAちゃん, こう, こっちの袋のほうもつ。

B: (他) だめ。

A: (他) だってAちゃんの犬のほうだもん。

B: (他) じゃあ, はいよ。

A: (演) はい, いぬくーん, ほらほらほら。

B: (演) んー。

A: (宣) お姉ちゃん (B) がそばにいたら怒るのね, この, Aちゃんのわんちゃん。

A: (演) ほらほら, わんちゃん。わんわんわんわん!

B: (演) こらー。

A: (演) ごめんね, おれのわんちゃんね, お姉ちゃん (Bのこと) が大嫌いってい, いうからねー。ごめんね。ほら, だめでしょ。やったらねー。やったらお兄ちゃん (A自身) 怒るからねー。

3. 会話の理解

● 幼児による質問の理解

幼児は4歳になるころには、「今、ここ」とらわれず、ルーチンを利用したごっこ遊びやエピソード記憶にもとづく会話をするのが可能になる（エピソード記憶を語っている例は大久保の(6)文章構成期にもみられる。ただしこの段階ではまだじゅうぶんに時間や場所を示す語が用いられておらず、文脈を共有しない他者には意味がわかりにくい）。しかし幼児の会話はまだ直接的、明示的、実質的であり、意図や含意を読みとるといった、推論が要求される発話は理解されず産出もされにくい。

たとえば子どもが他者の欲求や信念についてどのように理解しているか（心の理論）を検討する課題としてつぎのようなものがある¹⁰⁾。「ジェーンは子猫を見つけたい。子猫は子ども部屋にいる。しかしジェーンは子猫が台所にいると思っている。ジェーンは子猫を見つけるためにどこを探すだろうか」という問いである。この問いに対する3歳児の典型的な答えは「子ども部屋」であり、子どもたちはジェーンの心の状態（ジェーンが子猫の場所として抱いている信念）を正しく把握していないと解釈される。しかしシーガル（Siegal, M.）¹¹⁾は、幼児が正解できないのは質問の意図が理解できないからではないかと考えた。「ジェーンは、子猫を見つけるためにどこを探すだろうか」という問いは大人にとっては「過った信念を抱いたジェーンはどこを『最初に』探すだろうか」を意味する。だが幼児は「最初に」を読みとることができないのではないか、というのである。実際、「ジェーンは子猫を見つけるためにどこを『最初に』探すだろうか」と問うたところ、就学前児の83%、3歳児の88%が正答できたという。ことばが文脈に応じてどのように

用いられるかについての知識や理論を語用論という。大人ならば容易な語用論的な推論も、幼児にとってはまだ困難であるといえよう。

●児童の要求・拒否表現

「暑いんですけど」と言うことで「窓を開けてください」という要求を表現したり「手がはなせないんです」と言うことで要求に応えられないことを表現したりすることを、間接的表現という。婉曲な表現は丁寧な印象を与えるため、大人の会話では頻繁に用いられる。だが、このような間接的表現の理解や産出は、児童であっても困難である。仲は小学校3年生、5年生、中学生、大学生の二人組に「本だなを動かすのを手伝う」というようなトピックを与え、一方には手伝ってくれるようお願いする役を、もうひとりには断わる役を演じてもらった。自由に会話をつくってもらうのだが、小学校の段階では、要求—拒否が、「やって」—「いやだ」のような直接的な表現になることが多かった¹²⁾。「ひとりじゃできないんだけどなあ」—「今、勉強で忙しいんだもの」というような間接的な会話は中学校以降で、増加がみられたのである。

語彙、文法、さまざまな知識、そして推論の力などが加わってより複雑な会話が可能になる。会話の発達は長い年月をかけてゆっくりと進んでいくといえるだろう。

●参考図書

大久保愛『子育ての言語学』三省堂選書（1987）

岡本夏木『子どもとことば』岩波新書（1982）